

『空』Ⅱ

- The Full Metal Cool -

—人間存在の實存的分析による存在論考—『空』の解説文

アプリケーション・ソフトウェア (Application software) とはコンピュータ上で特定の作業をする機能を持ったソフトウェアを指すが、当時は書籍の意図をApp化する動きが、数年前から広がってきた時期であった。すなわちデジタルデータとなっている小説の楽曲に、画像や映像、音画や楽曲、効果音などを加えたり、写真集、歌詞、ライナーノーツ (liner notes) やアーティスト情報、文献図解を附加したり、読み上げ機能等多角的に情報を提供したり、TwitterやFacebookと連動してコメントを添え、感想や意見を共有し合えたり、書籍においては用語やセリフを検索したり、さらにはゲームの要素を持たせて作世界を別のかたちで体験できるようにする等々、縦的・双方向的に機能する作品へと変えようというわけだ。

小説に於いてもバーチャル・リアリティ的な作品がゲームとの境を曖昧にし、また読者がいじることでできる小説例え、読者が登場人物の作ったホームページを閲覧するところまで、これによってその人物が生きる世界の一部を体験できるなど、すなわち参加するところできる小説などがネット上に公開され、ホームページのコンテンツを主役にした作品が紡がれるようにまでなるとそれは従前の小説のように言語を文字で記した内容物として胸中に再現されて存在する世界、その中に身を投入し、記述内容を追体験するのではなく、現実の物的に存在する物であった。

天平普蕭は夢想する
あまのふしり

『空』がこの傾向が進み、五感を刺激し、バーチャル・リアリティ体験をさせることによって、RPG (ロールプレイングゲーム) や音楽や香道、絵画や造形美術や映画や文学が一体化した、現実存在的なミュージカル、演劇、新しい絵芸、術が生まれるに違いない。

彼は高校卒業後、大学に進学しながらも古書を蒐集していた。骨董のように古本や古文書の巻物を弄り玩ぶのが好きだ。『空』を再度編纂べく文App化等も視野になどと思い始めたのが最初の編纂から一週間も隔てない、月末近い雨水の次候であったのか、さよふつふつと思い募らせていた。

さよふつふつとも天易真分の著『人間存在の實存的分析による存在論』、『空』とは、いかなる作品であったか。

第一義的に、これはコンセプトアル・アートである。

冊子そのものが小説を構成する媒体であるかのように見せる仕掛けが冒頭と末尾に在り、雄弁に語らう。読んでいくうちに内容と相余って益々その観が沁みこめる。文中、主人公が自分が活字であるところをきり気な言つてゐる。

すなわち『人間存在の實存的分析による存在論』、『空』という本、その本という物質が、又はディスプレイ上の表示等々の物質が作品である。それではけれども同じではないか、どんな小説も本には違いない。そもそもそれは作品と言ふのか。強いて言えば物質とは神の創りたもつた作品ではないのか。それを個人の作品と言ふのか。それとも神の御業を賞讃せよと訴えているのか。それにしても真々の綴つたその本の偉業ではあるまい。他の誰かが上梓した本でもいい

わけだ。コンセプトたり得るのか。何もなしでもう昔から成遂げられている。すべての作者がそれを成遂げているではないか。

しかし作者である真は敢えて囁くのである。

「それこそこの作品の特徴、特性、特質である点、卓越したところである」と。

實はこの発言には出典がある。

眞神郡龍春村に龍筆寺という土刹があるが、室町時代にその僧であった眞藤の弟子、龍鳳という禪僧が龍春神社に奉獻した公案録の肇輯第十段「叙盤記」に以下のような公案があるのだ。

眞曰、文趣眞奚焉にしろども、究竟せ

龍曰、卷十皆同じく究竟ならすや

眞曰、佳文究竟の所以

「この眞や眞藤のことだ。龍、龍鳳、すなわち師である眞藤が弟子の龍鳳に問う、師弟の間合である。その主意は次のようになる。

眞藤が言った、この卷十に何が書かれていようと書かれた内容に關係なくこの卷十は究竟の

真理を表しているのだ。

龍鳳が言った、ならば、すべての卷十に究竟の真理が書かれているところになってしまいますが。

眞藤が言った、それこそこの卷十の卓越性であり、この文が究竟である理由なのだ。

ちなみに眞神神社に残された奥本『叙無記』眞藤版には「佳文究竟の所以」というところが「佳文特異究竟の所以」となっている。ただし解説は同義であるとされている。この公案は當時から眞神一帯では広く知られ、高々称讃されている。江戸時代の禪僧日善はこれを讀して「悉羅万象を平等に貫通せる無記を嚆手」とその著『叙無記義疏』に延べている。

これが『空』の畢竟の真髓である、というのが通説だ。

だからと言って内容がない小説ではない。

小説のジャンルとしては論小説に分類されるべきものである。そして論を極限まで突き詰めて、眞實の究極に迫ろうとしている。ただしその追究は虚しく未遂に終わる。一切の前提存在を認めず問えば、問いはいつしもない袋小路に入る。わかりようのない、解決のない場所に放擲されてしまつ。どこにもならない矛盾、いや、矛盾すら成立しない、問つてきき問いの対象だ。問いそのものが問い質され、人間は上にも下にも前後左右にも行けなくなる。わか

る上が何なのかわからなくなる。その北極の涯で求問し、中絶折せざるを得ない。しかしそれは何よりも真實と違いない。結局何十年何万年経っても人類は最終結論を見出さないのだから。

そしてそこに在るのは、ただこの冊子のみなのである。

さこそその構成を鑑みよ。

この小説は親なる論理を骨髄として構築される上を志し、創られた。章段の構築は太まかに言えば前段と後段に分かれる。もう少し詳しく言つと、イントロ及びプロローグならびに前段及び後段である。

イントロとは唐突に、補遺註釋的な附属文から始まっている。補遺註釋文である以上、本来はその右段に補遺註釋すべき対象の文章なり何なりがなければならぬが、この小説は突如そこから始まっている。そうする上によつて逆に實在性を強調しているのである。

右の頁にあると架空されているものは『申叙文』と呼ばれる文を撮影した寫眞である。申叙文はある物事に就いて説明的に申叙している文で、すなわち補遺註釋的なものだ。著者の直筆であった『空』の原書『和綴の冊子』を天平菫蕭が纂輯して木版に改めた本（いわゆる天平本初版 the first edition、俗称『オリジナル本』である）に於いて、その扉の部分にこの申叙文が記されている上、いふ上になつてゐるという設定である。しかしこれでは右寫眞が何を書いたものを撮つたかわからなくて、印象が曖昧になる上を危惧し、わざわざ右寫眞にある文字は草書体で書かれ、読み難いので、教科書体フォントで左の次の行に再掲載する」と、その頁に教科書体の「申叙文」を載せている。

次にその申叙文が申叙している物事についてであるが、これはある茶掛（茶掛け幅、茶室の床の間に掛けられる軸物で、巻物の断簡を装幀したものや書、本畫の花鳥風月などがある）、すなわち『私藏皇野燒小孔貫入説叙文』と呼ばれる茶掛が、原寸大の複製画となつて天平本に折り添えられていると、實際には附いていないが、に就いてである。しかも念の入つた事にその茶掛の内容も次の頁に明朝体フォントで再掲されているのだ。※左の抜粋を参照。

幾重にもない物があるように記述され、断片的唐突に始まることで即物的な實在性を強調しようとしている。

なお、これ以上やるとならないように敢えて詳述しなかつたが、申叙文の傍らには説明小文が記されている上になつていて、それは、以下藤「この説叙文の同文を次頁に掲載す。但し明朝体印刷活字に替へ縮小す。又惟れへ『天易の末簡たる天易象が曾祖父の筆を擲擲す』を併録す。原書は毛筆書にあれども楷書体の活字へ替へ縮小印刷す。及び編纂輯者の補遺註釋を附す」という記述である。これも原文は草書で書かれて読み難いという理由で、教科書体フォントにて左行に再掲される。

イントロの次はプロローグだが、これは後でも叙べる上言つたが、ここまで『空』に関して叙べた上はすべて後の頁に記載される内容と重複するが、『天平菫蕭』という實在の人物が出て来て、『空』を手を取つて著者と取りをするシーンが出て来る。そして著書を紹介する年代記がぶつりと記載され、ようやく前段となる序叙が始まるかと思いきや、『人間存在の實存的分析による存在論考（空）』という本の表紙と著作権（出版権）を明示する洋風奥附もくじがあり、

あたかも本の中に實在の本があるかのような森田氣を醸す。

そしてようやく前段「序叙」『存在の意味・究明の實踐に基づく實在的解説及び予備的基礎分析』だ。

いわゆる序論的な部分という設定だが、事實的には本文で、天倉寛今の情けない片想い、醜い赤体験が叙べられている。そこでは人間は「自」直のためにすべてが自分に対して脅威でない事すべてが自分を異和のない状態を求めるが、同時にそれが他者であることを願っている。なぜなら他者であり、異叛感がなければ、それと合致した感覚が得られないよう構築されているからである。永劫矛盾

すなわち完全な矛盾した要請で、達成できない希求である。これは明らかな設定ミスだ。しかし真はこれを生存の畏れと読み解く。

達成できないことで欣求するところ止まず、人は無我夢中で執執し、永遠に駆り立てられ、己が事がない。生存が人を捉え、生きさせ願うを続ける、永劫に。

すべてはそのための絡繰りで、だから意味など求めても何も得られないのである。左様に明らかに諦めの気持で静かに過すが、ある日ふと、志野焼の茶碗を見、忽然と思ひ至る。理屈を超えた、現實たる、実存する真理がこの黙する物質性の中に、言葉にならず思考にもならない、老練のよう実存する教養がある。

彼、真今は願願する。『どうか、あなたの天叡をお與えください』

だが璋方もなく古い存在である藤は軽やかに笑う。

『愚かな、おまえは何を言うか。わしに実存を訊く申すか』

『どうです。逝しへなるあなたが慕らせる古く深い聲言説譚話、扱えるがゆえに動するとなぐ、實體ある実存の、実存となつ名の教養を哀れな小生に、お與えください』

だが藤は手を振って物憂げに顔を背ける。

『愚かなことを喚くもの哉、古く東西いすくに、実存たる教養のあらんや。頑是もなにもしなげしを申すものよ。太古より存在し者に藤なる実存の天叡があるとおまえは言う。だがそもそも実存とは何か』

『とても言葉にはできません。諸概念には嵌らないからです。老概念としての存在ではない人間にとっては、それは真正しく『非』です。『非』にすらも非なる非情の城壁のよう聳えています。』

小生は小生を脱目へと志向させ、自超越を繰り返し何度か繰り返して強要する生存の絡繰りから遁れられませんが、何も彼もがこの脱目運動ではないからです。諸概念は長い過ぎない。到底人間の智慧では遁れられません。教えるべきです。』

『愚かな者が。ならば教えるのがあつか。そもそも知らんわ』

『逆に言えば、それが事實として存在するときの空の現實的な存在の仕方ではないのでしょうか』

『だがどう云うなとおまえの思考の産物であり、理教性支えられ、構築されたものではないか。呆れ果てた奴よ。人間どもの相も変わらぬ主観、いつまなからの堂々巡りではある。空転する絡繰りを駆の愚昧な鼠のよう、とくに永劫に幻想を弄

つて戯れ無爲徒に倦むを知らず、空想を玩ぶ。愚かな世にあるは只管現實のみぞ。それ以上もそれ以下もあるが。しかしそう説いてもおまへらは更に現實を概観して古戯に替へてしまふ。現實が登だ。つまり答はない。我々はその都度対応するしかない。それが登だ」と。そう云うやり方しか知らんだ。やめろ、やめろ。さような古戯聞きたくもないね。重壓が狭苦しく煩わしき立った乾燥と辛患と疲弊とに満ち盈ちておるね。實在はやとおまへには未だわからぬか。さまでも申すぞ、あたかも摩訶般若海羅漢多心経神咒の義を叙さんとするかの哀れ」

その瞬間に大いなる解脫が真々に天啓の雷の如く貫き降臨する。そして

「小生は既に廊下を歩いていた。既に下駄を突っかけて庭に出ていた。

すなわち既に茶室へと向かつていた。坐す。炭を熾し、茶釜掛けた。炭斗から炭を取り出す。香炉にくべた。野雁の羽箒の下に隠れていた桑柄の火箸を指にはさむ。湯気が立つてきた。碗を擲く。裏を開けた。竹の茶杓を捜す。

白竹一本桶の、中ほどに竹の節があるように詠われ、蟻腰あいつこという見掛、丁寧に漆拭き爲れたその竹節は裏を包んでいた裂の傍らの畳の上で落ちていた」

の二節に尽きるのである。

さて、その次に後段となる「本文『實存的分析による解離としての普遍的現象的存在論』が始まる。

その内容には、まったくアクションがなく、理論をまず言説のみで埋まっている。当初のアイデアである「論議で構成された純統體小説」であることがこの本文で顕著になる。

説の主旨は、白野焼の名碗『うつは花牆』のレプリカを前に始まる。

真茶はレプリカであってもそれとそれなりによい」と言ふ。では、同じですがね。汝爾なんじはこれ同一の器物をどこかで覽になったことがありませんか。あるわけがない。ないからです」

だがこの碗も他の碗とともに『碗』の名で豪々大雑に押し入れられている。具象の精緻細密の燦爛が均されてしまっている。だが人間だからこんなもので済むのであつても、それが人間以外の生き物であつたなら茶碗も鍋も漬物石も皆同じであつた。そう鑑みれば、これ認識発展の歴史とは対象を精細化・明晰化し、際立たせ、独立させ、自己で隔つのである。自己の主観に影響されない、自立的、客観的な存在に仕立てることであり、分離独立を促し、一般化、他者化するとも言える。だが實は人間のこのような認識運動の動機はその逆にある。分離独立させながら、同時にそれを認識するところによってそれを取り込む。つまり従前以上に乖離したものを取り込むことによって自己を拡大し、自己定の諸元を増大させ、異他の範囲を減するところだと真茶は言ふ。さよふ比較してみれば大雑に括りであっても、いへうかまとは言ふのと、すなわち進化の歴史は客観性の獲得の歴史でもあると言ふ。そこで真茶は問ふ、

汝爾なんじにお訊ねいたしますしやうや。畢竟、我々の生きる世界をどのように考えられるか」

生きるとは、世界を持つこと、他ならぬ。他者からの干渉や他者を以て做す情、思料や活動すべてである。一切は他との関わりに他ならない。自らの殻からの超越である。アメーバでも世界観を以て生に臨み、先天的に内奥化する動機に衝き動かされて世界を做し、つまり「世界へと超越」する。世界観は『生きていく』と云う現在進行形であり、生命発祥の動機を源泉として噴く。外界の模写ではない。

そこを考えればあらゆる物質的区々も同様、諸概念、連帯と言ふ。有機物、いや、無機物も諸概念を持つと言ふ。すなわち諸概念というものについて我々は認識を新たにしなければならぬ。

又これら世界観の変遷史を概観するとき、この運動主体が自らの設定、拘束の閉鎖性を拒み、より外へ解放されようと欲して解脱を求め、志向性を有するかのように観せられる。脱目態エスケイプだらんと志向するかのように直観される。物質をも含めた全体が、かつ運動すると発想するとき、まるで宇宙開闢のビッグバンが既にその性を持つて生誕したかのように感じられる。

宇宙が拡大し続けているのと同様に、宇宙の一細胞である人間も、脱目態を志向し続けているとすれば、諸概念の大雑把さに耐えられないところにも深い根拠があることになる。もっと多くの情報が盛られ、巧緻に、亮次の完成、より精細であり、アリティを欲す。さらなる他者性の極限を求める。平坦な諸概念は満ちず、より高度な他者性、より複雑な精緻な動的捉えかたを欲する。

「二で、先に進むにあたって真実は一つ断りを入れる。

」が、またその前序敘についての聴従を願う次第、小生がこれから語るところの神話は一切断るとなくとも、『小生に於いては、と云う限界附きのものでも』と、飽まで小生にとつてはしかかであると言ふ、小生は観せられる、異限で有効限のものであり、ただ小生に直観するように観せられているまでに過ぎない』と云ふことを厳格に定義して措かせて戴きましよう」

そして論は次に進む。

諸概念は対象が自同二義であるとき初めてそれを理解・把握する。よつて本来、諸概念を以て做られた世界は静物画のようであるてはならないはずだ。同二義性で構築されるからだ。一秒後も一秒前も、林檎はその林檎であり、あつたのだとされる。だが時間性を考慮すれば、一瞬たりとも同一性が維持されるはずはない。これは不思議なことだ。實際で思考の把握方式が一致しない。事象が遷移するのだから概念も同二義性を了解の条件とするべきではないはずなのだ。なによそのような不合理な矛盾構造があるのか。

そこで真々は言つ。

『覽しあれ。これな『罍』を手にし、よくよく玩まされよかし。そう、いがか。この『罍』と云う奴の自同二性のなきは、小孔を貫入によつて做された表面が丘陵地の起伏のようではないでしょうか。いや、實際、これは一つの丘陵なのです。どうです。事象が事實であるとの作の救ひが眼の奥底を抜き透るようではありませんか。これは殆ど黒絳の墨の枯淡と思つてよいでしょう。いかにもありがたい、摩訶般若泥羅多心経の写本もまた、實在するは古びた紙本の上の、乾涸した墨汗でしかない。いかがですか。わからない？ そのとおり。事實は不可得不可説が本来、かよを云、妙義と申す』

自然の做す微妙は古尺の筆による糸掛の、よく甚深い。人をして身も裂く焦燥に駆り、静謐がある、と。そして「すなわち時間性と言ふものがなかつたとしても、汝爾が『不可得』アム・ノ・ラと言われたとおりに、事象は同一性を維持しないか

のどこ捉えられない。同一性は一瞬に於いてすら維持されず、メンボタミヤの原風景から魚の鱗やら能葉やら色色したシテ島の土生真魚らが同一瞬に燦々^{キラキラ}と消滅する。蛇蝎の移つて背の色の若く、無限の同時多義性として受け止められる。あたかも捉えるような形式自体が喪失の一形式のように感じられ、原的に絡繰^{スネール}りが仕組まれているかの気がする。

彼^レはこれを人類、畢竟の課題の一つとして、烈しく追究され、熾^シきならなければならない、と言ふ。

「いたい、小生らが観ているものは、ほんとに自然そのものなのでしょうか。違います。内奥に在る動機の糸頭が累積された世界観です。その『自然』像です。脳髓の、脳神経細胞の働き効果の内在としてしかあり得ない構築物です。だがそだとすれば、奇異なことです。要請による創作物であり、自己の都合にたオトクチュールでありながら、自らを欺くかのどこ収まらない。自ら志向(異逆)を倣し、かつち欺まつたところを感じさせない。それゆゑ焦燥させられる。激烈に求めさせられる。もつと精緻を、もつと明晰を、もつとリアルを、もつと一般性を、客観性を、他者性を、と際限なく求め続けざるを得ない。

どこが作爲的ではないでしょうか。人間に掛けられた罫であるかのようではないでしょうか。なぜ小生らは同一性を維持する本質が倣^レれずしてはものを捉えられないのか。又この疑問は何ゆゑに起るのか。こんな疑問に起る必要がないのではないか。なぜこの事に気が附く認識能力が與えられているのか。又自己の都合によつて造られたものが自己の要請に合致せねばならぬと云う断定はなぜ正論思われるのか。すべては偶然の前提として条件もなく是認されている。又なぜ無条件是認はいけないのか。問はず切りが無い。独り立ちする考概は一つとしてなく、理數を授けられしこの魂魄には異叛の群れでしかない」

すべてがかくも異逆廻逆に見える。人間は一方で理數を與えられ、また一方では異叛する群れに投げ出されている。あたかも異逆廻逆を受難^レべく仕組まれているかのよう。なぜか。

すなわち収まりが附かぬように造られ、人はより迫真的に新しい喜を限りなく追い求め、妄執する。駆られ、拍車がかかる。より過剰に欣求して飽くことがない。把握不可能の地域に思いも及ばぬ精細精緻が無尽蔵にあるかのよう。垣間見られ、焦がれ、炙られずにいられない。強い鮮度を、烈しい明晰を、リアリティを求欲せずにはいられない。リアリティを持つ真顔の並亡の魅惑に囚われるのは、これゆゑではないか。精細精緻を求欲するとは、これゆゑではないか。

しかもこのことは原初以来、内奥に在る動機が外へ向かつて顕在しようとして、さらにはより拡大しようとする超越への嗜好性、例外・新奇への志向、脱目態への志向とを致する。

かくして人は無際限に外向を欲する。自以外をないものを欲して進化する。いたい、どこまで逝くのでしょうか。涯なく何處までもです。終わるところは許されていない。宇宙の膨張もまた当初科學者の出した予測に反し、今も加速し続けている。理由はわからない。自超越の繰り返ししかない。

より脱目的たらんと志向し、エクスタシスの幸福を求欲する、その意義が見出せなくとも問題はない。あらゆる議論の以前にからだ。諸概の一切がその後^レにそれによつて造られたからである。

脱目への志向を問ひ糾すとはできない。それがすべてであるからだ。

人間存在は邊を作る装置だと真々は言う。意識は背叛しな爲せない。例外しか斬新じゃない。非情しか切實じゃない。他者性しか迫真しない。客観性しかリアルじゃない。一般性しか現實じゃない。それが目超越し、脱目だから。真と云う文字が逆さ吊りされた斬首の象形であり、非業の死、無惨な屍骸であるとは意味深い。

そしてまた、真々は「言つ、

「人には非情なリアリテイ、諸々の考概に染められない無記の事實が清々快と感ぜられる。

人爲から乖離した無情性が余りに多くの地域で神聖崇め奉られている所以もこれにあります。

古果本邦に於いても、神ながらの道は清々を重ね、元来は人爲の做せる社殿がなく、現住にもまた、鳥屋の尖には那智の御瀨があるばかりの飛瀧神社、或いは三輪山の山裾、鳥屋が設けられるのみにて天照皇大神をお祀り申し上げる檜原神社などがあります。が、實にれなども人の眞が致すところでありませう」

しかしそう言いながらも彼は又

「人爲虚し。いや、然し、さうでせうか？　そもそも小生は謂ふ處の理叡や了解も、飛瀧、檜原の御社のやう、無情なる即爾自然ではないでせうか。

慮られよ。意識・理叡・了解そして感覺、これら何でせうか？　それらはまず事象を做します。価値分別を做します。考概を做します。小生はこれら全体を、畢竟、考概であると考えます。根拠はありません。ただ、さういふ風に措定する、つてです」

彼によれば、諸考概が斯くなるすがたにたち定められたる由を我々は知らない。諸考概とは理叡を礎とした論理を以て做されるが、彼は「小生は解する處、曷ぞを解さずば了解た唐突。そもそも諸考概いづくにか理叡性あるか。殺伐たる物象とあらざるや。さてもよく顧みすれば、其にあるは『理叡』に若かず、その尖漠としてわからぬま。理叡性著しくぞ。』りえい』に若かず。理叡を做すと雖も而も問をに成なし。理叡性あるものは、渺茫として空莫。蛇蠍、蠅蠅、蠅、蠅、蠅、蠅候

しかしながら、かやうなる結論へ是非もなく導くは、畢竟、脱目への志向なのです。かやうに認識するこの清涼快慶なること、及ぶものなし。脱目的快樂にしまれば」

そこで彼は彼が過去に著わした哲學文に於いて録した教行を読み聴かせる。このような認識の仕方、脱目的快樂が在ると主張する。

『ニューロンの軸索にまでインパルスを伝えられ、その尖にあるシナプス小胞を刺激され、神経伝達物質、アルタミン酸と心臓を分泌せられ、受側のニューロンの樹状突起にある受容体に向かつて分泌物を投射せられ、受側細胞のナトリウム・イオンの伝達路を開かれ、細胞外のナトリウム・イオンを入れられ、カリウム・イオン濃度を高かつた細胞内のナトリウム・イオン濃度を上げられ、内外の電位差を逆転せられ、静止電位の状態を発火現象せしめられている。これを以て畢竟、諸考概とは案ぞや、と糾されても答へようがない。ただ、唐突に了解が生じ、納得と云ふ心的事態

が起っているに過ぎない。精神だの、思想だの、理性だの、観念だのと言ったって徹の繁殖や菌類の繁殖と何ら変わらない。アメーバの分裂と同じ、ウイルスの活動との相違なし』

しかし読み上げておきながら彼はこれに回けて疑惑の蒼白き水剣を振る。

すなわちインパルスが、ニューロンよりニューロンへと伝わっているという、客観的な事實観察は我々の意識といふものが正確かつ妥当であることが實証されてからでなければ無効であるからだ。これに対して實測に基づく客観性の極みであるから異論の余地はないという反論も想定できる。

しかしそうではない。

観察や、分析や、理論が載る土俵は意識である。意識それ自体が証明されなければ無効だ。だが意識の妥当性を証せんと欲するならば如何にすればよいだろうか。そのためには意識を起す前意識が「正しい」ことを証明しなければならない。しかしそんなことはできない。意識矛盾の法則

そして意識のみならず、意識として表象している諸々の概念の妥当性をも實証しなければならない。例えば、意識に映ずる様々な事象、抽象、適切、やら、本質、やら、妥当、やらという諸概念も實証しなければならない。しかしどうやって、そんなことも可能だろうか。

なぜなら通例では、未証明のものは証明に使えない。これら未証明の諸概念を使えない。とすればどんな証明方法も根底から崩れる。

又實証という手段は實証性があるかどうかとも、實証されなければならない。

「いつまでも到底不可能だ。しかもそのようなことを質するも前」問うという自体が無条件に是認されているように批判し、問う糾ぐべきではないのか。しかし又同時に問うべきでもある。無条件の是認がなぜ不適切かを、もはや…

完全なるConfusionだ。

なにと言わせているのだ、このような矛盾や破壊自体も論の定式を支えられている。論の定款に従うならば、このような矛盾や破壊もZYのような。何のいつかを…だがいったい論は止しているのか。論理性は正鵠を得ているのか。しかし正鵠が否かを云々するこの評価方法及びこのConcept並みのConcept、このConcept自体も又正鵠を得ているのか。なぜ未証明のもの、確立していないものは實証に使ってはいけないのか。いやいや、このような論及も又論の「正鵠」さの判定の内にもではないか。何をしているのか、我々は。意識と同一矛盾に陥ります。

何をしようが意識だし、諸概念を使っているとして、論考定款に法(そと)として。

彼(す)れはRationality Contradiction 合理性矛盾と呼んだ。判断停止を選択する「ハイインディキダント」。

逝(さ)く逝(さ)かぬも爲(な)すべくも悲(かな)みや。悲(かな)むらく悲(かな)みや。知(し)るべし。虚(うつろ)い身(み)を察(さ)げずかは」と言い、真(ま)のresearch card (MS ff. 126-33*) の左(ひだり)の「ハイ」用(よう)の「」のとき彼は「引用する、アと言ひなすべし、転載する」と言っている。すなわち自分が紙面上の存在であることを表明している。

『すなはち解決不能、了解不可能の事態に候。是非にも可不可にも帰結す處あり得べからず。理叡及び理叡性を不可解也と批判するも、その批判する論理性、理性が既に癡癡癡たる無念哉、是れ何處にか逝くべきや』

永劫矛盾する二焦燥の絡繰りに引き摺り込まれて逝くような気がする。異なうか。もつとに嵌まるように造られているから嵌まるのは当然なのだ。奇蹟でも不可思議でもない。コペルニクスの転回だ。他になんか答へが知覺の範囲内にあるか。なぜなら問つても虚しい。他の在り方は想像も附かない。

さてここで彼は一度反省し、彼のこういう考え方に對してヒューマニストならどう反駁するだろうと想定する。

『どのとても人紛れなく現實に苦しみ切實を感じて候。佳れを認めぬは到底不可能事に候。現實は変更しがたぐ、廢せざる絶壁。非情無表情。かるがゆゑに現實なりとぞ嘆かざるれ。

事象に還れ。犬蓼を詠ふ。君が敷衍、繁文縷れ、好事家の戯れ』

すなわち論理性矛盾のわけのわからない役にも立たない戯論をちやちや言つな、とてもかくても現實は現實に、眼の前にあるとおり廢然と非情なまでに動かし難き發せいで、と言つてゐるのだ。むつとそのとおりである。

それゆゑにリアルなのである。非情は他者ゆゑにリアリティなのである。原的直觀に映えるまだ。廢然として諸概念を附さんと云へる人間たちに對し、埴のような無表情を見せつける。それは『か唐突がある。爬虫類より表情なく、物的無味乾燥を呈し、埴の面の若く處する物性、非知、理叡を絶し、畢竟云言つべきもの。

空性、不可捉の極みであり、脱目の求欲する窮極であり、現實性の真髓なのだ。

すると想定上のヒューマニストは呵々大笑する。

『どうともいふ哉。とてもかくても候。只唯現實烏爾也』

右手を伸ばして果實を掴めば左手は伸びて果實を掴む。歩みで水を汲まば歩み奇られし水汲まる也。それが現實、眞

實は只唯只管現實也』

すると今度は貞觀正國寺の僧が突如場面に入し、言つ。

『しかるに、拙僧の鑑みるに、その人道的懺悔も又復、意識に唐突焉と措かれたる處を敘するに若かず。

云、自靈焉。廻佳れ縁緒もなく傍無人に唐突、忽焉に自ずと爾なるものを云。

理叡と呼ばれ、理性と做るも、それには爲傲れるもの、抑々理叡性とは勿論唐突に非ずや。事象と異はす。

異はすかは。双説乃ち『おな』也』

一二で眞は独り。

原因・理由・根拠に拠らずに、自ずから現われると言ふよりか、與えられ、そのように觀せしめられ、その『觀』という特異な場所に置かれている気がする。そういう雰囲気がある。

そのような感覺を強いられ、そのような『考概』という處に擲られ、棄けられて『ここから』という觀を拭い難い。といふような判断へと擡はれる、そのように觀せられる。しかし『觀』といふことが何かわからない、知らない。だがわかつたからつて何だろうか。『了解』という非知でしかない。いや、それ以上、それ前、いやいや、いや

そもそもわかるに何であつたか。何をしたことになるのか。問い求めて暮められるものか。くだらない、わからなくとも生きて逝ける、わからなくともわかる倅生きて逝けばいい。

「路傍の石 岩に生えたる雑草 茅葺屋根に生ずる 小きき急 清り流れに糸すす深緑の藻 雨に濡れ霽す松趣 蟬の技
け殻 躊躇の水に流る黄色き朽ち葉 放擲され緑苔す茶碗の欠片」

すなわち龍峯寺の龍鳳の公案録肇輯第十七段「叙無記」だ。

龍曰 卷子皆同じく究竟ならずや

しかしこの究竟に至つても彼の批判は止まず、言う。

「參^{さん}迄^{まで}に左へ當^{あた}該^{がい}文^{ぶん}。その斷^{こと}りの言^{こと}擧^あを再^{また}掲^あす。畢竟^{ひつじやう}小生^{せうせい}に於^おいてはさう也^{なり}。と云^い丈^{ばかり}乃事^{なりこと}也^{なり}。更^{さら}に又^{また}斯^{かく}く云^い之^{なり}。れさへも同様^{どうがう}亦^{また}實^{じつ}限^{げん}りにての話^わにして而^{しか}も觀^みせらる^る丈^{ばかり}乃事^{なりこと}に若^{ごと}かず。繰^{くり}の言^{こと}也^{なり}。

しかしまたその前に序叙についての「聽從を願ふ次第。小生がこれから語るこの神話は一切斷るとなるとも、平生に於いては」と云ふ「附附」のものであると、飽

結局何の結語にも達せず、いや、結語に達しないという結語にも達せられず、さらば結局なきものならざるや」と

虚し。抑々鳥や、さういふ善概は、いやと思はるゝと云へども、又非想非想處とても

問へ、曷なんぞやそれと。虚しと想ふも虚や。虚とは何ぞ。曷とは何ぞ。不知しんぞく。民衆みんしゆの爲す意味根柢なき慣習くわんしゆの考と変はらじ。當日頃民衆みんしゆを蒙昧と難し小生とて衆の側在らず。民衆が通俗の俗に信すと変はらじ。同じ也。而して何をな爲可なすべし歟。

人 堂々果敢すべし。

同じも違ふも『おなじ』也。『だが』と謂はずかは、眞仮虚實止謬多言不當互和異聲非真亦復如是。而して空

と云了解ふりやうけへ爲す勿れ。

ただげんじつたるのみかな
只眞實爲爾日鼓を爲

人 義しきと以ふを爲すべし。

かゝるかゝるのつひばのやうせいさう
故飛瀧檜原乃様清爽たれ。さすれば今考へらる限り最善最高最大最強最鋭の脱自へ、幸甚へ、涅槃爲樂

做す異更事无き狂騒狂舞の猛疾へと、静謐され給ふと必定に候。

又顧みすれば、その片鱗、レプリカ『卯花牆』の土味にてさへ陰翳深々みづみづ響り候。未嘗有微妙みめうの法悦あり。

碗を眞味し、こゝ静かに参入す。

愉たのしみしからずや」

……という話であらう。

さて、話戻して App 化の動きは田舎まがみである眞神まがみに於いても例外ではなく、その天易眞分の著作も App 化しようという話を持ち上がった。

それが小説『Full Metal Cool』であらう。

それは平成廿四年壬辰、壬寅雨水の末候、すなわち新暦の三月上旬であつた。湯気立つ宴の席、薄暗い石油ランプの下でのこと。田圃の真中を八岐大蛇が這うように走る。古く、鬱蒼と暗い杉並木の旧街道、道祖神のある四辻、樹齡千年の大楠の下、蕎麦屋酒屋『雨龍』という場所であつた。

江戸時代の前半までは村の小集場だつたところで、眞神郡の村々はいずれも農家だが、古来風俗の地で、遅くとも江戸の初期、早ければ土壌、奈良時代には集会所の度と有、後、蕎麦や酒が振る舞われるのが常であり、いつしかその担当者も固定され、やがて店主がいになり、遅くとも幕末の頃には喧嘩つきのない、酔狂な蕎麦屋酒屋となつてゐた。

宴とは言へ、当時は皆が十七から十九までの健康な未成年でもあり、また、車くるまこゝまで来ていたし、喰くひの事が主ではあつたが。

そのとき居たのは、白舟大衆、天之哥舞伎、天音普薫、同源臥羅軍士、いずれも星のような名家の者で、眞神では高貴な身分の者たちである。特に同源家は主家である藝家から分かれた家であり、その家は読んで字の如く源が同じの意であつた。

では、不当の天平普蔵が

彼こそ言った。

「貴君の意を受けてこれを代表し、事務局として實務を担当し、App 化實現に向けて当面の作業を行い、しかるべく準備を整えてから貴君らへ連絡し、皆でこの大なる事業にあたろうと思っていかがか」

異議なし。

普蔵くんは当面の實務を全面委任する。その進め方は君の考えで行っていい

会合の席での総意を受け、普蔵は翌日から「The plan for making the application of "KOO"」を實行する。まずはApp 化準備委員会を立ち上げるべきだと考えた。委員をどうもいっい候補者の案を作成し、眞神村にある眞神の大御社、普蔵家に赴いた。

普蔵家の者は神具でも権神具でもないが、祖神である神幣部西厨御が眞神の部族 *the* の創世主である高神で、すなわちかつて蝦夷の地のまつろわぬ者でもあった眞神の邦の王家が普蔵家なのである。

さて翌日、好天であった。寒い地方ゆえ雪が降り積もっていたのであったが、普蔵は相変わらずサイケデリックな服装で出掛けた。

難久簗駅から眞神鉄道の単線単車軌の電車に乗り、龍舌、畝邸と過ぎて無人で茅葺根を持つ眞神駅に着く。そもそも普蔵はこの眞神村にあるのだが、難久簗町の神中洲で古本業を営み、都立、多を神中洲で寝食し、大學へ通っていたので、計らずも久しぶりの里帰りであった。

本屋には期限を決めぬ休業の貼り紙をしていた。この程度のことはいつものことで、今回に限らない。

眞神は特別の地で、彼ら眞神族は財を船に満載して海を渡り、縄文の時代にこの日本に上陸し、千年を平和に暮したが、紀元五〇〇年代に大和朝廷と争い、戦争の末、一転してまつろわぬ族から帝臣下の礼を取る地方豪族となる。特例的に既得財産の継続保有を公認され、以来、連綿と世襲している。そのため、身は農業者、庶民であっても、誰もが大きな家屋敷に立派な門を構え、絹物をまとい、雪駄を履いて、名主（西日本では庄屋、東北では「肝煎」といふ）のように暮らしていた。

普蔵も例に洩れず、商売の古金稼業が片手間で、店を放つて遊子となるも常で、流浪しては水雲、朗詠を樂しむ花鳥風月を愛する身の上だから、そのようなことが可能なのもある。

氷雪が雨水に化する候とは言え、古代には蝦夷と呼ばれたの地では、未だ寒き厳しく、平らかな田圃に積雪に人家が鼠痕のように点在し、繁った丘が寂寥鬱々とする眞神の景観は童女の石庭を連想させた。

さて普蔵とは肩に長い金髪をマッシュルーム・カットにして、顎の尖った猛禽類のような顔立ち、ハーフ・コートがベルベット地で大きな襟とカフス、黒いシルクにサイケデリックな花柄を施したボヘミアンタイが髣髴ハ蝶のように見える男であった。雪に沈む田村では毒蜘蛛のように目立つ。

普蔵の實家である旧家、天平家の本家は常緑の樹木を籠盛させて島のように浮かんでいた。しかし彼は顧みもせず

歩く。田畑の尽きた處に着く。そこはたかみツイヨルドの海岸線のように、山林と田圃が境を接していた。

丘の上、中段、又は丘と丘の狭間の溪谷に沿い、いくつかの家が石垣を構えて建っている。天之家^{あまの}本家及び分家であった。

普齋はそれにも眼を遣らず、溪谷口の細い道を進む。数十中も行かぬうちに谷が深くなり、道は尽きた。

村の真奥、独峯たる眞神山がある。独虎白龍史龍巖峯などの山々を背に屹立していた。聖なる御山は荒岩を粗く積んで出来た縦長の立方体で円錐形ではない。覆つよう、びっしり樹木が繁茂していても、所々に巨石や大巖が剥き出しているのどそれと知れるのだ。

山と山の上には樹木の生繁ったエンパイア・ステート・ビルディング *the Empire State Building* 帝国州ビルのようにであった。

岩が剥き出されている場所では松が横枝を伸ばし、他の場所では楠や榎、櫻、檜、辛夷、杉、北日本には珍しい榎や檜（眞神には樹齡 千五百年のものがあり、台湾の二千年より古い）、常濃緑色の椿、梅なども群生するところが多い。縦實が縄文の重要食糧であったという常緑の椎が繁り、冬もこれほどなら夏はさらに鬱蒼するであろう景色。

雲霞に包まれるが、とき眞神の御山の岩棚に階層を成すかのように、豪壮な民家屋敷が階層を成すかのように数軒ある。それが壱之家^{いちのや}だった。

その敷地は眞神山にあつて、石を累ねた約 0.7 km の垣に囲まれている。山の傾斜角が垂直に近いので、石垣はまるで松の爪巻きのように見た。そして又その廻りを幅 10 m の眞神川が濠のように流れ、衛つている。

標高 399 m、剣の如くに峻嶒な山頂には神が降臨するとされる壱座^{いちざ}と縄文時代の祭祀の跡があり、神壱之眞^{かみいちのま}が主都^{しよと}壱玖鷲^{いくささ}を築いたと伝承されていた。壱座は石型の大石で、眞神山のミニチュアのような形をしている。

壱之家屋敷の門は切妻平入だった。

檜皮葺の屋根は棟に近くなるほど斜が急となり、天を衝くようせり上がっている。逆に下方は平らかで、広々大きく、特に正面に長く長方形の影を伸ばし、所謂流造の体となっていた。その姿は迫るように見え、神威があり、威風堂々、土地では龍門と呼ばれた。

普齋は燦々たる赫を仰ぎつづける。

川を渡る龍爪橋^{りゆうそう}があり、いまは鉄製の橋だが、かつては木製の跳ね橋だった。ところで、跳ね橋というと、板状のものを想い浮かべるが、当時の橋造神社の海老虹梁^{えびにこうりやう}のような形状の木材を組み合わせ、半ば折り畳むように収納される形式の、世界でも珍しい跳ね橋で、見事な木彫が瀟灑^{しょうがい}に施され、その奇観風景が龍爪のようであったところからその名になった。

現在の架橋はレース lace のように鉄を瀟灑に編み込んで空架され、橋の中央に、重櫓門、下層階のみならず、下層階にも屋根の附いた櫓門^{りよもん}があり、殆ど閉じられるとのない門付き西扉の左右には簡衛用の詰め所がある。門の階部分は華美極彩で、欄干を備え、瓦屋根の四隅がより反り上がっていた。中華と西欧の奇妙な組み合わせ。

なお橋は他の場所にも二箇所架かつており、それは明治末期に築かれた石橋で、洞窟を改造した車庫に繋がっていた。車庫はいまでは空調機械や洗濯装置や休憩室、油圧式のジャッキなども備え、英国の1905年型ネーピア Napier から始まってフガッティ Fugate のヴェイロン Veron まで千数点を保管している。その橋は特に名はない。

さて、龍爪橋を渡ると第二の岩棚に着く。

そこには高さ15 mの石垣を切って造った橋があり、橋を登ると石垣で囲われた四角いスペースに入る。すると左手、橋とは直角の位置に石垣を切って、高麗があった。高麗を登ると短い板橋で、狭い岩棚に着く。そこは鎮守の杜のように鬱蒼として、清流が瀧のように右進って流れ、真神川へと落ちていた。傍らには鑄鉄製の龍貝があり、それは口から清水を迸らせる手水場であった。

そこから葛折りの狭くて古い、朽ち毀れ足した石段が続く。そのすぐ脇に水力で動くエレベーターがあり、普蔵は迷わず乗る。なお、このエレベーターは複数人、若くは重量が重い場合は動き始めるのが遅くなる。

鉄製籠のエレベーターは葉枝の翳から景色を見ることもできる。降りるとやはり鬱蒼とした、暗くて狭い岩棚で、縄文時代の城門があった。巨石の柱に巨石の屋根を載せたものだ。普蔵はぐもり、吊り橋を渡って大きく開けた岩棚に着く。高くて傾斜の急な尖った屋根の母屋が見える。

母屋の大きな正面の玄関は切妻破風で、中に龍の画かれた衝立があり、その奥は天井の高い板の間になっていたが、行き着く先に壁はなく、屋外に抜け、そこはただ廻廊が廻るのみ。

そして廻廊の門は様間で、上には扇額がある。

いつか蕭々と雨の降る中、真神の鬱蒼たる奥をかき分けて、狭く吃つ沢を頼りなく危く歩き、垂直に聳る真神の御山をようやく登って御社のその様間に着く見上げるとき、諸兄は見えてあつた、それはすなわち左のように記されている。

舞臺廻廊御大御神

おんしんおんわおんれおんれかしこみかしこみれいたまふりまふり

うけひかみくしくすみあけくふかくたがはず
誓約神妙清明甚深不互

あまてらすすめのおおみかみ
天照皇大神

頓首頓首良惶慚奉礼拝

おおひるめのむちのかみ
大日靈貴神

頓首頓首良惶慚奉礼拝

あめのみなかぬしのかみ
天之御中主神

頓首頓首良惶慚奉礼拝

北極紫微大帝

頓首頓首良惶慚奉礼拝

北斗真君

頓首頓首良惶慚奉礼拝

廻廊の廻る敷地の奥は檜皮葺の幣殿となっていた。幣殿内部は閉ざされて見えぬが、そこは捧げ物を献上するための無

垢材の臺があるばかり。

幣殿の向うにあるべき本殿はなく、たゞ上木葺御間、即ち大鳥居が立っていて、荒々しい大巖の数々と老木樹の原始の群生があるだけ。あたかも眞神の御山の頂にある盤座を崇め奉るかのようであつた。

鳥居は二輪鳥居、明神鳥居の左右に小さな明神鳥居がある形式。なお明神鳥居は茅末の下に島木があり、左右端が反っている形式。竿木と貫を額束で繋ぐタイプが多いに似ていたが、竿木の反りが著しい。

神社建築は棧間・廻廊・幣殿・本殿と見るとき、まことに贅々家屋敷は棧間の役割を果たしていた。又その左右翼が半ば廻廊としての役割を持ち、廻廊は重構造になっている。

この鳥居から切妻破風までは垣素なる神事のための道とされ、且素家人や来客はその左右隣にあやや小振りの唐破風玄関を使った。

普齋は右関で履物を脱ぐ。框を上かつて上歩進むと左右伸びる畳敷きの大廊下だ。右が公的スペースで、大御社としての施設となっていた。左は贅々家の居住区へと続く。真直ぐ正面へ進めば先程の廻廊に至っていた。

幣殿へは眞神斗人であれば誰でも唐破風関から自由に入ることができる。即ち一般の神社廻廊のように参拝ができた。左廊が贅々家専用で、右廊が一般の眞神斗人用といわけである。

因みに眞神斗人とは上木葺御間、眞神村、軟郎村、龍村、薺簀町に住む人たちで、西暦九八八年の火々禽の柵の戦で大和朝廷に敗れるまでは朝廷を奉るわぬ人々だった蝦夷眞神人の子孫たちだ。眞神斗人第五式四代族長である贅々爲弓草飛也は齡良歳、贅々裂の曾祖父に当たる。

『空』はこの大御社にある檜の無垢材で調度された奉獻の間に収められていた。

そこには眞神神教の教書、『天真神書経』(眞神の名の由来、の林千貞多羅葉版とヒエログリフ・パピルス版と楔形文字タブレット版がまとめられている。なお経典は神齋開裂木御の創世神話から始まり、聖者贅々爲の物語で終わっていた。

玄関で人を呼ばわつて用件を生ひると、三天晝の晝の間で一時間待たされ、当主の贅々爲弓草飛也がその高齡をもとめず、鬘鏤として現われ、対応する。真々の著作はこれ程この眞神では神聖な事項として認められていた。

普齋は爲弓草飛也の指示により、屋敷とは別の小岩棚にある母屋の禊所へ盥洗沐浴し、その上で母屋に戻つて、導かれるままに幣殿に上がり、正座して爲弓草飛也に対面し、神籤の儀を執り行つてもらつた。

神に問ふ委員の人選の中には普齋目にも含まれている。

爲弓草飛也が神を振るつた。三方の上にいくつかの籤が残る。それに記されている名前が神の選んだ人物である。

普齋は礼拝一礼して幣殿から下がつた。

かくして準備委員が定まると、普齋は和紙と墨と硯と筆を借りて委囁状を作成し、贅々家の保管する神聖な委囁状に押した。神籤は神意であるから委囁を受けた者はそれを拒むことができない。

翌々第二回の準備委員は開催される次第となつた。

集まった準備委員らは御社傍の無垢の檜造られた禊所を齋沐浴の上、岩棚と岳棚を結ぶ木製の大橋の上にある栴板葺の青龍庵に集い、諭す。開始後、まず天ノ哥舞伎が獅子吼の火を噴いた。

波打つ鬘のような長髪に華魁の着物を羽織り、リーヴァイス (Levi's) を穿き、孔雀図の大扇(煙簀)を持っている。首飾りや腕輪を幾重にも重ね、耳飾りが数条、鼻輪を二、指は玉飾だらけだった。頬がこけて眼窩が深く、眼は大きい瞳は小さく鋭い。サン＝ジユスト Louis-Antoine de Saint-Just 1767.8.25-1794.7.28 革命の大使 *Aldange de la Revolution*) のようなタイをしていた。

茶幸と柶の黒炭、火轡のかかった備煎焼の茶碗

『そもそも『空』は存在が作品である。

紙媒体であつたが、データであつたが、App 化しようが、存在であることには変わりないじゃないか。

表現上の変化がない。同じパフォーマンスの繰り返した。俗書(謂つてこの『空の上に空を破るようなもの』)といわへだ。無用な重複だぜ』

普蘆公言つ、

『だがそれが現実だ。

ふふ、そうだが、意味なんか関係ない。『存在』がパフォーマンスであるとはいふことだ。

現実が『空』だ。現実が『空』という作思。抑々それを言うなら、全書物は存在だから既に重複だ。『存在』を表現とする以上は避けられない重複、というよりはむしろそれがこの書物のパフォーマンス、本筋やつと意図していることだ。

違つか、哥舞伎

君の言う左様な理窟は所詮、理窟に過ぎない。抑々譚という、思考運航を規定する方程式は該譚が脆弱で、空架の論議が疑義の対象なのに該譚を求めるとは。しかし、この判定自体が論議考であけれども、いや、はあ、きりがない。同義反復の無限旋律、矛盾の永劫なる遁走曲 *fugue* だよ。

これは絶対矛盾と言へべき類のもの、Impossible Mission 啊

そう言つて一蹴した上で

『そんな此事はさて置き、App 化にあつては検討委員会を設け、その委員とすべき人物を選定して今後どのように進めて行くかを定めるべきと思うが、どうか。むしろ、ま、哥舞伎から意見があつたように、App 化の是非をもめて検討するのだ』

毛糸の帽子、上ジーンズ、"Take It Easy" と印刷されたTシャツ、草臥れて汚れたハイカットのバスケットシューズ

のふんふん

無精鬚、三百眼、龍套村の平衡隆臥は頷き、応えた。彼も当時はまだ高校生であつた。受験も就職も諦め、隠居生活を考へてゐる。

『裂へんを入れるべきです。

彼は癡之本家の直系です。正統で、歴史的な真神の真髓です。僕の意見としては、普肅くん、あだは眞實の名に於いて検討委員にもなるべきです」

普肅はその尖った鼻で隆臥の進言を肯んじた。

「僕もそう思う。そうすることを止し」

炎春、慶は濃い赤色の髪、太い眉で、眼差しの熱い若者で、Tシャツの上に米軍の古いフライト・ジャケット、B3を着用している。彼も又大いに賛同し、

善哉、善哉

『空』の原本が癡之家の大御社に奉獻されているとだし、正統な主家加わるのは素晴らしい。正義だ。二石、馬といふわけだ。

ちなみに、昨々、豪華版とも言つべき螺鈿象嵌の象牙細工漆金泥版の眞神の御山に奉納されたと聞くが」

隆臥は再び頷き、

「ええ、知っています。」

癡之イタルくんの鎮魂祭に合わせて、べ裂くん、吼羅羅くん、真々くんが大御神酒とともに献上しました」

検討委員は癡之べ裂、白舟大楽、天平普肅となった。大楽は小太りで象眼で、大きな歯と大きな口でにやり笑い、敵村村住、吾気なギヤクターに似合わず、凝り性で細かい作業が好きなお男であった。

直ちにApp化の検討が開始され、アプリ化は決定し、背景効果音・作品ゆかりの場所を探訪する動画・イメージ画像文獻などの画像資料編、さらに本文を音声で読み上げる機能を付ける、などの意見が案出された。

App作成を具体的に進めるApp作成委員会を作業部会を立ち上げることとなり、人選が左の如く行われる。作成委員には筆者の真々も含まれた。作成委員は検討委員会の意見に基づき、基本設計を構築した。

作成委員
天易真々

同原吼羅羅

天平普肅

癡之べ裂

作業部会
平衛隆臥

天之哥舞伎

炎春慶

白舟大楽

癡佐早藏

「二二各家の家柄、眞神での存在意義を記す。

まず同源家は壺之家の父家であり、源を壺と同じくするから同源という名を賜わったといふ。天之家は眞神族の大貴族で、天土家はその父家、壺之家は代々の大臣職で、平衛家は壺之家の近衛の家柄であり、白井家は眞神族の水車を司り、天倉家は卜占の家柄、炎家は代々鍛冶屋であつた。

さて、かくして作成委員会の基本設計をもとに、佐藤氏が實施設計をし、かつ實際の作成を行い、Web上の公開までするところなる。

大樂が皆に相談した。

「究極の實踐・實用書とするためには、どうしたらよいだろう。たとえば、読んだ者が解脱できるような書物にするため」

「しかし解脱とは何でしょうか」

早藏がその質問に疑義を呈した。彼は後、東京の六本木のマンションに住み、實家から毎月四拾萬の仕送りをもつながら、馬場下町の老舗時計店に就職し、仕事に行く前はサンタ・マリア・ノウエラのヴェルティナソープを手にシヤワーを浴びてイルチエボの重いシェイバーホルダーを使った剃刀で髪を剃り、重いと手を入れた必要がなく、剃りに斑がでない、らしい、吹き出物などがあつて頬に血が滲むときは、エモスターナイユ石（この小さな石のスティックで撫でると血の滲みぐらひはすぐに止まる）をあて、イタリヤ高級チーズ、パルミジャーノ・レッジャーノのストラヴェツキオを頬張り、パルマのプロシュートに、『伝統的な』と称するところの救がない逸品、ヴィッラビジョーニガンベッティのバルサミコをかは、海綿のシャツを着て、モンク・スラップの靴を履き、アルマーニのスーツにシルクのタイで、一部の隙もなくキメ、マセラッティを運転して出勤する青年になるのだが、当時はまだ高校生であつた。哥羅伎がせせら笑い、

「平安末期に日本を席卷した末法觀によれば伝説は十五百年後廢ると言われたぞだが、眞神代々の巨魁、眞神の眞神である大易家の末裔なる眞々くんの言説は早くも廢れようとしているのか。そのような問いが再び繰り返されれば、早藏よ、思い出せ。この眞神なら、小學生だつて知っているところだ。

龍峯寺の僧、眞神の弟子、龍鳳が龍神に奉獻した公案録『無記』だ。譬喩第十七段の抜粋をいまだに思い出せ。

『卷五同故集究竟（かすみなおしゆき）のすみきまつ』とな

すると隆臥も我が意を得たと言わんばかりに大いに肯き、然り。

『空』の本文中にも明確に記されているやないか。『人、堂々果敢すべし。口管現實鳥爾（ただげんじつたるのみかな）張分（おも）鷲。人義しき（おも）以ふを爲すよし』だ。いみじくも叙説されているではないか」

春慶が頷く。

「なるほど。『清明在躬氣如神、清明躬（おも）在れば氣神の如し。』『礼記』孔子問居篇』だ」

【参考】

『禮記』孔子閒居篇 第七章

天有四時 春秋夏 風雨露 無非教也。地載神氣 神氣風霆 風霆流形 庶物露生 無非教也。清明在躬 氣志如神 嗜欲將至 有聞必先 天降時雨 山川出雲 其詩曰 嵩高惟嶽 峻極于天 惟嶽降神 生甫及申。惟申及甫 惟周之翰 四國之蕃 四方之貢。此文武之德也。三代之主也。必矣聞 詩云 明明天子 令聞不已。三代之德也。弛其文德 協此四國 大王之德也。子夏蹶然而起 負牆而立曰 弟子敢不承乎。

隆臥が暗轉に顔を響める

「かしこやうて言つてしまつては 結局特性が生じ、『零子問』とは言ふなつてしまつてはいませんか。いや、むん、こゝ言つてしまつても又 同じに陥るよになつてしまひますが」

哥舞伎が笑う、

「うわはは、とてもかゝるも候さ。まして現實あるのみだ。右行へても 左行へてもできる。人は寧ろ果敢すべし。正しいと思つてを爲すしかない。うん、折にふれての文節を口にする度に新に學ぶ樂さがある」

早蕨は未だ理解できない風であつたが、

「癡イタルくんの曲を入れてはどうかでしょうか」

哥舞伎がにべもなく言つ、

音源が殆どないよ」

しかし隆臥が反した、

「僕らで演奏するのさ」

春慶が手を打つ、

「ならば作曲もしようぜ。『KOO』やうな曲を作らんだ」

大樂が提案する、

民族音楽をサンプリングしてサイケな感じにしよう。ブライアン・ジョーンズの『シヤジュカ』みたいな感じはどうかな」

隆臥が微笑み

「イスラーム (Muhammad-Islam) のアザーン (アザン、^{アザン} 佛教の般涅槃經多心經、インドのマントラ、^{マントラ} 真言・曼荼羅など) で荘厳しよう。

グレゴリオ聖歌 (Gregorian chant) やビギニング正教 (Exarchia of EMoog) の聖歌やいろいろないかな」

春慶が言う、

「イタルの遺したスケッチとか、あつたはずじゃないか」

哥羅伎が乗り気のない口調で

「あつたよ。」

どうせなら、画像も自作してはどうか。手書きや写真グラフィックとか」

隆臥が

素晴らしい。

じゃ、意見が或る程度まとまったら、実行の前に一度作成委員会を提議して決議を受けましょう。

そのように入念に仕上げましょう。何よりもプロセスを楽しみたい。ゆつくりじっくりと、しゃぶりように、舐めように、です」

作成委員会を承認し、基本設計は纏まった。基本設計（左参照）の完成に伴い、作成委員会解散し、作成委員たちは實働部隊として作業部会に新たに向ふ。なお、基本設計は中途で救度の改稿を終了したが、最終的な完成状態が完成した段階で、図絵的に装飾されて大いに面目を改められ、あたかも金剛界胎藏界両部の曼荼羅図を兼ねるかのような、意味合い以上の太極図のような、崇高な神聖高図象となった。その図も最終的には真神の大御社、真神神社に御神酒や山海の幸とともに奉納された。

本文 原本の超高解像度画像（10 億画素）、

豪華丁版の超高解像度画像（10 億画素）

音楽 イタルの曲、オリジナル・コラージュ・ミュージック

資料文献 真神八千年史、火々禽の柵の軍記、真神神話紀、

原本のマテリアルの詳細解説

資料画像 天易真之丞左衛門（真々の曾祖父）の茶掛けの画像、

龍谷村の風景、原本原材料すべての詳細な超高画質画像（10 億画

素）、オリジナルの画像コラージュ、イタルのスケッチ

資料動画 真神十人の里の風景

撮影は高価な特殊機材を使って入念慎重に行われた。

『空』はコンテンツ内容ではなく、物質性が肝要なため、和紙は絹の繊維が混ざった白い手漉きもの、緞、雲龍紋が金線で刷られ、その上に篆書隸書、楷書、直書などが毛筆で綴られ、稀に骨文字なども鑲められていた……とされているから、それを精確無比に記録できる機材が必要とされたのだ。

作中では『天立菩薩』と称す人物が『空』の原書（手書品のように精巧に作られたとされる『空』は世に一つしかなく、まったく同じ複製は経費と時間が掛かり過ぎて、再複製するには到底普及できないから……）という設定になっているのを汎用に再複製し、これに前文と年代記[chronicle]とを添え、なおかつ真々の曾祖父の書いた茶掛けの複製図画を添附し

て、自費出版的に一般に公開したという設定になっているが、その下を求めて裏方の創ったフィクションである。ただし、前述のとおり、後に『空』の豪華版が実際に造られた。

同様に、実在する茶掛『私蔵白古野焼小孔貫入説紋』も精細明晰に10億画素で撮影し、掲載する次第を相成った。

でそれが、

茶陶それ

しのとそひ
しにしそあれ

小孔

貫入
火色

あらはれ

長石釉と云

釉薬の

白くならし

しの
釉

卵に
かすみしか
の鉄絵
付

美濃の碗

である。かように参考の為、文面のみを掲載して掲ぐ。

なお、画素数を上げて画質に拘るのはリアルに近ければ近いほどマテリアル感覚が逼真し、真實を表現するパフォーマンスになるという考えだ。

なお『空』の冒頭には、実際には添附されていないの茶掛の複製図画を冊子に添附している頁が綴られ、これを以て唐突に始まっているとは最初に叙べたが、その文章は右に左のとおり。

右、申叙す文の寫眞。申叙文とは、天易眞あまのまこと著「人間存在の實存的分析による存在論考」『空』直筆原書を天平あまのひらいて普肅が纂輯し木版に改、上製せし本。以「空本」と。扉に録る文。「茶掛『私藏白志野焼小孔貫入説叙文』」以「説叙文」と。原寸大複製図画を天平本に折り添へし事申叙す。説叙文とは、天易眞が曾祖父、天易眞あまのまこと之丞左右衛門が藏せる「白野焼」茶碗を平叙解説し、懷紙に綴りし文。装幀のうへ、茶掛にさる。なを右申叙文は草書体にて今様入に廣く読み解かると言ひ難きゆゑ教科書体へ替へ、次左之行へ文之寫を掲す。かやう再掲し、空學徒の學究魂を涵す。

申叙文再掲「添附 天易眞あまのまこと之丞左右衛門書私藏白志野焼小孔貫入説叙文原寸大複製図画」其文解「天易眞あまのまこと之丞左右衛門書『私藏白志野焼小孔貫入説叙文』原寸大複製図画を添附す」

又、申叙文には補足説明小文。以「空」と。が傍記され、小文の旨。一、扉の次頁に説叙文の文を明朝体にて掲載せし旨（次頁参照）。二、其處に『天易家の末裔たる天易眞が曾祖父の筆を押捺す』以「擲」を併せ録す旨。及び押捺原文。天易眞が垂露及び龍爪の傍に楷書かぎ、及び癡有ちゆう。活字楷書かぎと替へ録す。三、押捺に纂輯者 玉蕭ぎょ之の補遺注釋を附す旨。以上。なを小文も文章書にて今様に難く、教科書体へ替へ、次左行再掲し、學究魂に資す。

小文再掲「於下一頁載し説叙文の同文。但修改し向明朝體の活字字體於て縮小す。又一起載惟『天易家末裔天易眞が曾祖父の筆を擲捺す』原書は毛筆の手寫修改し向楷書體の活字字體於て縮小す。又做編纂輯者の補遺注釋附」其文解「この説叙文の同文を次頁に掲載す。但し、明朝体印刷活字に替へ縮小す。又惟れ『天易家の末裔たる天易眞が曾祖父の筆を押捺す』を併録す。原書は毛筆書にあれども楷書体の活字へ替へ縮小印刷す。及び編纂輯者の補遺注釋を附す」

平成廿四年壬辰 甲辰清明 虹始見 万物筌而清淨明潔 可知草名之候

神樂かみい中あ厨れ御ずが裔をなる眞神眞邦統羅祇之王かみい之末朝臣

史文あまのふみ篇纂書藏あまのふみ且止式位天平家二九八代肅肅が長子雨蕭が子普肅 再挂頓首

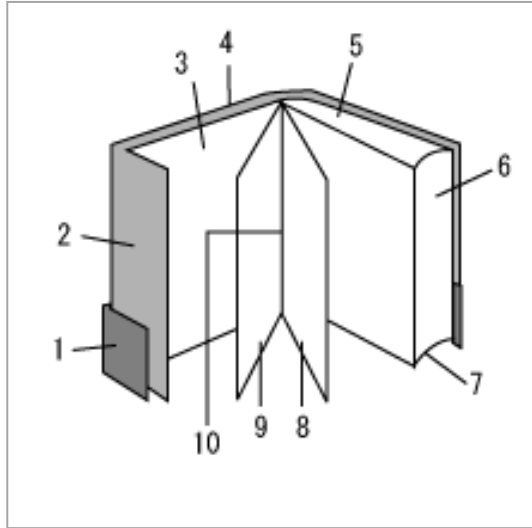
一二で仮想されている「右、申叙す文」の原文とは

添附

あまやすしんずいのすけざ ぬもんしよ
三つと題して書きたるもの
これに全巻のいれ入る説教と
原寸大複製図画

という文になるはずである。内容は再掲にあやどり。これが表紙の次もしくは見返し「遊び」の次の「二ひら」部分に録されているというのである。本のつくりについては参考に左に図解する。ただし図は和綴本ではなく、洋装の上製本だが。

1. 帯- ない場合も多い
2. そで (flap)
3. 見返し
4. カバー (jacket)
5. 天 (head)
6. 小口
7. 地 (tail)
8. 扉 (標題紙)
9. 遊び
10. のど (gutter)
11. 背 (spine)



※ウィキペディアフリー百科事典の「本」の項目より転載

また、申敘文には小文種説明の小文が附いている。傍記といふことになっている。それはいろいろ感じになるはずである。

たゞ一巻の説教と題して書きたるもの
これに全巻のいれ入る説教と
原寸大複製図画

この部分は研究者の間では非常に重視され、真々は何事に関しても、初に最重義の精髓を擲く癖がある。『
の concept を端的に象徵する部分であり、神咒、摩訶般若波羅蜜多心經、
の 掲題掲識、波

羅漢論 波羅僧論 菩提薩婆論 阿毘達磨毘婆沙論」の部分とも言べき部分である。

なぜこれが心臓と言ふのかその理由を言ふは、『空』の本旨深く関わっている。『空』の本旨はいったい、何か。これを敢えて一言で言ふならば 未遂不収(未だ遂げず、収まらず)『の俟に終わってしまいました……とほほほ……ううう』

我々は思考によって諸々の思考概念を論理定義に従い組み立て、納得という心情(了解)という心的な現象を起すが、與えられたままに使っているだけでしかなく、思考概念も論理という方程式も未証明、未証明なものが拠り所とするには足りないという結論へと導く方程式はやはり論理であり、すなわち未証明だ。

手も足も出ない。つまり我々は未遂不収の俟、言いかけて口半ば開けたまま次の句が継ぎ、茫然と居るしかないのである。どんな結論でもない。「非ず、にだ。述語がその述語を否定する」という、無限矛盾(走曲 fuga)と言つべき、構造的に解決の得られない構造的倒置文型、自らの尾を咬む原蛇(autopodag) ウロボロスの的矛盾を起す倒置文で表現するしかないような状況。この辺のことは App の扉にも録す。

-人間存在の實存的分析による存在論考-「空」

奉獻の義 眞神神社の扁額 申叙文 複写

私に於ひて、空とは、万葉集などに「三輪の檜原」と歌はれ、鳥居のただ在るのみにて、その先に幣殿も拝殿も本殿もなき、三輪山を拝するばかりの檜原神社や、那智の御瀧を拝むばかりの飛瀧(ひろう)神社のことにて候。

しからば路傍の石、岩に生えたる雑草、茅葺屋根に生す苔、小さき急く清ら流れに糸なす深緑の藻、雨に濡れ雫す松毬、蟬の抜け殻、蹲踞の水に泛ぶ黄色き朽ち葉、放擲され緑苔す茶碗の欠片。すなはち小説内にて「小説」冊子といふ自然を一つ置く。

本小説、文や綴られたる趣に真旨あるに非ず。ただ「小説」という Material、インク印字やパルプ紙繊維、又電子データ、コンテンツなどなり。

ただ小説の載るインターフェイス(冊子、ディスプレイ等々)、すなはち現にある存在の方こそが小説なりとふコンセプチュアル・アート Conceptual Art。「さればこれならずとも、一切小説同じならずや」、「さよう。さこそこれな小説の特異卓越性にしあれ。幽玄微妙深山雲霞のごと、もののあはれ」

前段は、長き序叙也。主人公の体験を素材に『真実』といふ設定を実存的に究明す。

後段が本文。主人公の一方的なる論説による純粹論理小説。究極の『真実』に迫るべく、論理の極限に挑むも虚し憊し。

烈しく猜疑し考え抜くもこんがらがって、畢竟、口半ば開きし俟、次の句なく、未遂不収。

いかなる結論にも至れず、何一つ遂げられない中途の俤。これはいかなる比喩でもなく、どこにも収まりが附かない状態といつてしかない、現状である。嘘偽りのない事實である。失敗してしまいました、と言つてである。

人間は数千年前からいままへ、ここから二歩も出ていないのかもしれない。まったく変わらず、餓えて駆られて焦がれ、求死、続けて燃え尽きて砕け乱れ散りながら噴火のごとく執着して止められないのが、永遠に変わらない現況ではないだろうか。なぜか。答は簡単だ。止まれば死だ。

生命は生きなければならぬ、生きていくためには行動しなければならぬ、行動するためには、何を行動すべきかを決めなくてはならない。迷つのは自由だが、時間は少ない。現實待つてくれない。状況によっては根拠が不実であつても、決断しなければならぬ。しかしその中で自体も状況次第だ。敢えて決断すべきではない時期もある。物事は常理単純ではない。思考の限りを尽くし、努力し、勇敢に歩むべし。時には理性も論考も超えて金剛乗、ヴァジリヤナのごとく非知なる、人智及びぬ養智に拠つて進まねばならぬ。

だからこの二を指し、理を超えて「入堂果敢ずべし」・「入義しき^{おと}ひを爲すよ」と言つのである。これを表現するに一切の論理性を剥奪破棄し、只管に現實存在である物質を晒す。答も解決も理解もない。ただ現實で行動とがあるのみ」と。

さて、『空』原書の撮影は、真神の大御社の奉獻の間に於いて、10億圓素の特製デジタル・カメラによつて、一頁二頁を慎重に、微細までも遺漏なく、精細に行われた。

べ裂は真神郡の風景、真神山、火々禽の柵の跡地、龍鬘鬟、火ノ鳥岩、龜瀾湖を撮影した。また既存の写真を採り、選定する。

火ノ鳥岩とは火々禽の柵の戦のとき、火ノ鳥が岩の上で降臨して鳴撃し、全身の炎で日輪よりも強く明るく真神の地を照らして真神斗人を鼓舞したところ伝承のあひ岩であり、独虎白龍岳の中腹に石刀のように立っている。

又べ裂は難外簗の町並みや、嚟茶『サン・ミッシェル』の外観・内装などを入念に撮影した。嚟茶店は『空』の前半の部で、主人公が片想いをした美しい女性を最初めた場所であつた。

他に、ミラージュとして使つたため、セウイーリヤSevillaとウルUrの神殿ZigguratとガーナRepublic of Ghanaの黄金海岸Gold CoastとニューヨークCity of New Yorkのタイムズ・スクウェアTimes Squareなどを赴つて、画像データを収集した。

普蕭と叭羅筆斗がイタルの音源を探して収集し、デジタル・リマスターする作業を開始する。又譚面を起してイタルの曲をリメイクし、レコーディングした。抑々入はイタルのバンド『MAM (The Quadruple Orf)』のメンバーであつた。

レコーディング中、たまにべ裂がやつて来てギターを弾いた。彼は以前もそんな風に『MAM』に参加していた。又オリジナル・ミュージックの作成のために普蕭はべ裂が画像と同時に収集した音をミラージュのように編集する手法を採用した。*musique concrete*に近い。

炎は動画の撮影で真神のあちこちを渉猟した。様々な天候で撮影を行った。特に雨天の真神出行の録画はとても面白い深いものであった。

大蔵は原書の素材と同一物を探し、分析研究し、論文を起稿した。

早蔵は文書館などで文献を渉猟した。東京の国会図書館なども行ったが、主として真神民族資料館や真神文書館などであった。真神ではその歴史に対する深い関心からすべての古文書や文献をデジタル・データ化していて、しかも真神斗人であれば無制限にコピーが許されていた。

早蔵は超薄型のノートブックPCを持ち歩き、データを次々収集した。

収集されたデータは普蔵と真蔵が毎深夜に普蔵宅の書庫で構成し、時計を作るように精色に application へと組み上げた。

又最後に真蔵が『KOO』作曲し、サイケデリックなコラージュ音楽に乗せた。彼のヴォーカルは早口で喋るような歌い方だ。bless harp を両手でミニートしながら、口を窄めて強く吹いたり吸ったりする。ことによってペンディングし、短い叫びのように鋭く堅い音で単調なリフを繰り返す。錆びたギターのは弦を掻き鳴らす。

それを再生して聴いた大蔵が腕を組んで唸った。

「アコースティックでこの音触

完全なる金属の装甲だ。Very Very Well done だ。無機質で無味乾燥、無償で非情、まったく無義情だ。まるでこれがフル・メタル・クール（つや）だぞ」

かゝって App 版としてのタイトルが決まり、『App』- 人間存在の實存的分析による存在論 第三』 Full Metal Cool Ver は完成し、普蔵によってネット上に公開される。

時は清明の候、旧暦で言えば二月だが、現代では四月の初旬であった。

さて二月が経ち、立夏の候となった。

無論どこからとも誰からも何の反応もない。

検察に引つ掛かるようになるまで、一か月以上かかったし、アクセス数は普蔵らが覗いた回数に完全一致だ。だいたい真神の人口の7、8%というところか。そもそも哲學小説に今日、どれほどの需要があるだろうか。しかし、そんなことは想定内の範囲であった。

早蔵が一つの疑義を呈した。

「人のレスポンスが気にはせんが、これを神に奉獻するにほどのようにしたらよいのでしょうか。」

デジタルは神に捧げるべきであるものなのではないでしょうか。

それに応えて老師、當時式拾遺であったがと呼ばれる、御大、真蔵がこう言った。

君が若者よ、若人よ、春秋に富む者、森佐家の早蔵よ、案ずるに足らず。

小生は長い時間熟慮し、呻吟し、魂を渉獵し、多を閲し、推敲を重ね、臺を求めた。しかし遂に二つの結論に至らなかった。それが小生の著『空』だ。未遂不収だ。未だに解憂析結論を遂げず、収まるべきところ収まつてもいない。別になんか言っているのではない。むしろダメなんだ。現状ではまだ、どんな結論も言えない。ただ現状だ。おまじだ、と言う以上に何も言えない。途中だ。みつともないただの現実だ。これは主張でも登でも提平でも結論でもない」

真琴はニでぐいと抹茶を喫した。

だが何もなしてよいという意味ではない。なせなら努力も革命も修正も足掻きも現實ではないか。小生は現實しかない。たゞ現實と言わなかつたか。何もしないことではない。普通は何もしないことの真逆だ。大概の人間は状況を改善しようと努力するではないか。何もしないのも現實だが、小生らの眞の渴望は違ふ。

だから行動せよ。果敢すべし。異があつたか。正しい根拠もないが、間違っている根拠もないのだ。考へてみて正しいと想う道を爲すべし。

即ちよゝ氣を附けて自らの意をよく閲し、心清々しい道を選ばば且すと心淨に、清く正しく愧ずるも悔ゆるも、憂
うも哀しむもなく、苦しむや執著を厭離し、輕やかに寧々果敢でいられる。

そうでなければ憂い、哀しみ、苦しみ、悔み、愧して俯くであらう。そうしたい者はずるがよい。
 しかしそれは本望ではない。

なせなら人は畜養しか有り得ないからだ。絶望有り得ないからだ。もし更に絶望とならば絶望もあるはずがない。

希望が心に残っているから絶望しているのだ。

即ち本当は希望したいのだ。

自らの意をよく閲せよと言つたのは例へばつうことをいう。憂い哀しき苦しむ悔みたい者でないのだ。それゆゑ心清浄なる正しき道を選べ。選択は避けられない。

さあ、諸卿^{しよけい}よ、現實は常に選択を迫る。猶予はない。現實が選択を迫るとき、正しいと考えたことを爲せ。

現實は非情であり、情状を酌量しない。

人が混沌の中にあつたときであつても、切羽詰まつた危機の最中にゐるときであつても、不安に苛まれ、恐怖に陥つたときであつても、容赦がない。悲劇に襲われ、絶望の淵に魂の崩れたときであつても、なおかつ現實は更なる過酷な試験を人に課する。

能く思考する暇もなく、常にただただ選択を迫る。根拠が十分であっても決断せねばならない。

正しいと考えたことを爲せ。それを間違つていふと言者が、いねば非難され、否定の烙印を押され、羞恥の果てには罰せられるであらう。

それをどう爲ることもできない。

それが現実だ。

堂堂果敢すべし。

心から正しいと思えるのなら抗え。但し己の真の心を閲せよ。勝て勝つ。敗れば敗れる。それしかない。

さて、葬之べ裂よ。

初代の族長なる眞神之国の葬玖邇の末裔よ、第百代族長なる垂磨之都の葬久那斗の末裔よ、又は第百七拾六代が東を屈指し、四千の歳月をかけ、戸瑠鬼纏栖の地、海なる葬之國、葬須瀧斗の荒野、大河のある井陀羅を眞神の一族が旅した後、この日の本に達した第參百拾六代神葬之眞斗の末裔よ、葬之夢人の孫にして葬之響実琉爲の息子である葬之べ裂よ。

そして眞神でも鬨つた戦士の末裔である諸卿らよ。

誇り高き、歴史ある、豪貴な者たちよ。

そして大いなる眞神十年の歴史よ。眞神斗人は過酷なる現実を闘い、かつ生き繋ぎ延べて来たり。

小生は眞神族はただ眞神之大御神、神葬御剣を信じてこの秋津島に達した。又火々禽の柵の戦以降、天照皇神をも信奉し、本邦に於いて和をなして今にある。これは信の力であつた。

小生は考える。

そして早蕨の問いに次の如くに答える。

このApp化の試みは何ら損得ではない。名畫でもない。ただ眞實を遂げるためだけに爲された。ただ神のため。

読まれるためではない。清廉である。潔い。

読まれるために書かれた小説は薄汚い。かすかではない。さかではない。きつたではない。

汚濁に塗れておる。人間臭い。純粋清潔ではない。人も獣である。獸性存せずや。人は所詮目玉を称賛するに過ぎない。人の評価は虚しい。空虚である。神の評価を切望せよ。

その思えばクセス数がない上はきつかな。辛いかな。天国への門は狭き門である。人の手垢なきは眞に目出度き事哉。

まきに神への奉獻に相応しい。さすれば紛つことなく、眞神之大御神に捧げ奉られた供物となるであつた。そして現に

神への獻辞が添えられている巻末附録參照ではないか。

小生はかく考える。

べ裂が大きく頷いた。

眞琴の言うとおりに進めよう。俺は敢えて決した。

ただ現実がある世界のさなかで事實とはそれを信じて者の連累で構成される。俺は葬之家として眞琴の意見を龍の如く肯ずる。

眞神の王として龍肯する。

義しい、正統なる、偉大なる主家による承認だ」

『龍虎善哉』

一同はそのように声を挙げて呵々大笑した。

その哄笑たるもあたかも赫たる日輪が燦々爛爛と炳ら炳らか焔らかに焰燐え、燭炸裂し、桃く燠爆のどし。その後、更に肅戒沐浴し、眞神で産した清鹽と樽酒を奉納し、清明の末候に合わぬ皓々たる月下、山上の盤座を想い描き仰いで礼拝し、壺之釜庫敷の大甕の大間にて黒漆蟻蚰の膳をならべ、祝賀の餐を催し、屠蘇散を混ぜた仙水を大いに飲み諺し、笑い、朗詠し、楽しんだ。

真々はギターを取り出し、再び『K.O.』を歌う。まさに真理は眼前にある、燼煎焼の徳利の火襷のようであった。物言わず、端嶺ど、物として静かに、情も見せず、佇んでいた。

かくして夜は更け、峨々と簪たる山影の眞神の山の頂に朝日が昇り、燦々赫燿と燃え上がるのであった。
清ら爽かに登み明く真幸くあれ。

以上
完

まったし

(参考資料：奉献の際に附した辞)



頓首頓首畏畏恐惶恐惶躬體擲地礼拝奏靖蛉洲中津国豊葦原大倭皇大御神

皇祖天照坐皇大御神

奉献

「人間存在の實存的分析による存在論考」
「空」



つまり『Full Metal Cool』は表紙にもとおり、¹人間存在の實存的分析による存在論考『ぞ』の解説文である。すなわち対象文である『空』が解説文(理調のみで構築された小説であるとすれば、こちらは實用でしかない解説文というわけだ。

つまり、そういうところが無味乾燥で、金属的であり、また實用性という面で、現実生活の装甲であり、それらを鑑みて『Full Metal Cool』と命名したのである。以上解説文の解説文であるが、これも又冊子性を強調する為の concept である。以上

では以上、これで金に筆を擱く。再会の日まではさよ

1	眞神之国の時代	BC8000	第 1～100 代
	彝玖邇の王		
2	斐園良之都の時代	Egypt BC6000	第 101～175 代
	匚（ハル）の神 又は穂瑠（ホル）の神、隼の神		
	彝久那斗 王	天之家が現る 天平家（天之家が分家）	
3	戸璃兔邇栖の時代	Libya BC4500	第 176～225 代
	伊弓禰の神	同源家へ分家 白舟家が現る 炎家が現る	
4	蓑之国の時代	Crete BC3500	第 226～275 代
	海上之大御神	彝佐家が現る 天平家が更に天易家へ分家 平衛家（アンシャル家）が近衛となる	
5	彝須灌斗の時代	Macedonia・Gandhara	
	御彝火鎚の神	BC2500	第 276～325 代
	日曜（ミール）の神	天草家 葦原家	八代家 赤門家
6	尹陀羅の時代	India BC1500	第 326～365 代
	尹陀羅の神 雷霆神	雨海家 衆善家	
7	神彝彌眞斗の時代	Japan BC700	第 366～524 代
		揖屋家 安和之家 甕槌家	
8	現代	第 524 代 第 525 代 第 526 代 第 527 代	彝之爲弓阜飛也 彝之弓夢人 彝之龍頌蘭 彝之ㄆ裂

最後に眞神の民族の簡史を歴史図を這つておく。年代とそれに対応する主家が第何代から第何代までであったかを右に記す。すなわちどの時代に主家が加つたかを記した。王名は初代彝玖邇王、第貳代彝久那斗王、及び現代彝之家を朱書した。その時代に優勢であつた神名も併記する。ただし吾輩年を通して常に神彝亞晒厨御が最高主宰神であることに変わりはない。英語表記は推定される地名。